

巻頭言

日本ホスピタリティ観光学会 会長

しまかわ たかし
島川 崇

神奈川大学国際日本学部 教授

若いころに複数の学会で事務局のお仕事を手伝ったことで、論文査読の裏側を目の当たりにしてきました。

論文査読の結果を執筆者に返送した際、反発し学会を退会する人、落ち込んで研究者になるのを諦める人を、決して少なくない数で見してきました。その事実を先輩研究者に告げたところ、みんな通ってきた道だ、厳しい査読を乗り越えてこそ一人前の研究者になるのだと言われました。でも、それらの方々が受け取った査読結果の内容を改めて見てみると、匿名なのをいいことに、それはまあ無責任で心無い言葉が並んでいる。査読つき論文を自分では書けない人も、他人の粗探しはできるものなんだなど感じました。公平性の名の下に匿名でやっているけれど、人の研究の方向性を曲げることの責任はそこから微塵も感じられない。心無い査読でどれだけのユニークな研究の萌芽を摘んできたか、誰もその現実を直視しようとはしませんでした。

一方で、査読は完全匿名で行われているはずなのに、権力者は情報をなぜか入手している。私も以前ある論文の査読で厳しい結果を返送した直後から、ある実力者から急に目の敵にされたこともありました。「ははーん、だから事務局はこの論文の査読を俺に頼んだのか」と感じました。

学会はどこもかしこも査読システムを変えず、この方法がいいと信じ込んでいます。そして、あっという間に生成AIは目覚ましい発展を遂げています。2年前にこんな未来を想像していたでしょうか。おおっぴらにはされていませんが、もう執筆者も生成AI利用、査読者も査読報告書を書くために生成AI利用なんて、学会はなんのためにあるのでしょうか。

論文・学会だけにとどまらず、人間の生き方も、AIに影響されて、知らず知らずのうちにAI的になっているように感じます。ここで、本来あるべき人間らしい生き方を貫くための査読方法を、論文査読のあり方検討委員会で検討し、新しい査読方法を編み出しました。他の学会はいざ知らず、我々のような小さく専門特化した学会の生きる道は、学会員がみんなでもとに歩むという点に集約されます。学会員がお互いに疑心暗鬼になるのではなく、人間として信頼し合い、助け合って、研究を発展させるのです。いまの「査読に通る論文」を書くのではなく、「次世代に伝えたい論文」を残すのです。そして、AIを表面的に排除するのではなく、共存する道を模索します。それを踏まえて、伴走査読という枠組みを構築しました。この方法もまだまだ粗はあると思います。ですが、旧態依然とした方法に縛られて身動きが取れないまま衰退していくよりも、次世代に向かって果敢に変えていく勇気だけは持ち続けて行きたいと考えます。

今後も、発行を重ねながら、さらに精度を上げていきたいと思っています。先人たちが積み上げてこられた業績の上に、我々がさらに小さな一段を積むことで、次の世代に希望をつなげていくことこそが研究者の使命であると肝に銘じ、この新しい論文集に将来の希望を託したいと思います。

2026年2月